



## 子宮の肉腫

(しきゅうのにくしゅ)



※内容を簡素に記載しております。詳しくはHPをご覧ください。

### 子宮の肉腫

婦人科領域の肉腫は珍しい疾患ですが、子宮体部に多く見られ、腔や外陰、卵巣など子宮体部以外から発生する肉腫は極めてまれです。WHO から 2020 年に発刊された国際分類では、がん肉腫が子宮体がんの組み込まれました。その結果、子宮肉腫の組織型は平滑筋肉腫、内膜間質肉腫（低異型度と高異型度）、未分化子宮肉腫、横紋筋肉腫などに分けられます。かなりまれなものとして腺肉腫というものもあります。

日本産科婦人科学会の婦人科腫瘍委員会による登録では、2019 年に治療を開始した子宮肉腫は 476 例で、うち平滑筋肉腫 243 例、次いで低異型度子宮内膜間質肉腫の 95 例の順でした。他に子宮肉腫とは別カテゴリーで、子宮腺肉腫が 43 例登録されていました。

### 症状について

子宮肉腫で自覚できる症状としては出血があげられますが、他の病気でもあらわれる症状であるため、出血があるからといって必ずしも肉腫であるとの判断はできません。異常がみられたら早めに受診することが大切です。

### 診断について

婦人科領域の肉腫では組織診断によって治療方針が異なります。組織診断が極めて重要です。ところが肉腫の病理の専門家も婦人科病理の専門家も日本には少ないため、同じ標本をみても施設によって診断が異なることも起こりえます。肉腫の診断で他院を受診する場合は、必ず病理標本（プレパラート）を一緒に借りて病理診断から再検討する必要があります。「子宮肉腫について」でも説明されているとおり、診断が難しいことが多くありますが、正しい診断が治療の第一歩となります。なかなか診断がつかない場合などは、がんの専門病院の診察を受けることが望まれます。

### 治療について

肉腫の種類や病期などにより選択肢は異なりますが、手術や薬物治療（抗がん剤、ホルモン剤）を行います。ただ、婦人科の肉腫は希少であるために症例が少なく、治療法が十分に確立されていないのが現状です。予後不良や再発率の高さ、妊孕性（にんようせい）温存の可否といった要因もあるため、医師とよく相談し、納得できる治療方法を選択することが大切です。

